

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25780117

研究課題名(和文) 独島/竹島問題と新聞報道1951～1965

研究課題名(英文) Dokdo/Takeshima Issue and Newspaper 1951-1965

研究代表者

黄宰源(Hwang, Jaewon)

早稲田大学・国際教養学術院・助手

研究者番号：40608775

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：分析の結果、日本政府の交渉姿勢は強硬な姿勢から妥協的な姿勢へ、また消極的な姿勢へ変化するという傾向が見られた。例えば、交渉の最終段階になると国際司法裁判所への付託を放棄し、問題の棚上げを示唆するなど問題の解決について消極的な姿勢で終始したと言わざるを得ない。他方、韓国政府の交渉姿勢は強硬な姿勢から柔軟な姿勢に移行し、再び強硬な姿勢に戻った。韓国政府は、独島問題は国交正常化と関係がないと主張してきたが、1965年6月22日の本調印の際には問題の棚上げを容認し、国交正常化後に継続交渉するとの立場を示したことは明らかである。

研究成果の概要(英文)：The analysis shows that the attitude of the Japanese Government participation in the negotiation changed from a hard-line approach to a more compromising and passive one. For instance, when the negotiation reached the final stage, the Japanese government abandoned the settlement by the International Court of Justice and agreed to normalize diplomatic relations as the main priority while shelving the Dokdo issue. On the other hand, the attitude of the Korean Government changed from a hard-line approach to a flexible one, and back again. The Korean Government right from the beginning of the negotiation, insisted that the Dokdo issue was not related to normalizing diplomatic relations; however, on 22nd June 1965 it agreed to shelve the issue for a time and focus on normalizing diplomatic relations.

研究分野：国際関係学

キーワード：日韓国交正常化交渉 独島・竹島問題 新聞論調 日韓関係

### 1. 研究開始当初の背景

1965年、国交が正常化してからほぼ半世紀になる現在、独島/竹島問題は依然として日韓関係の大きな懸案である。特に、2012年8月10日に行われた李明博大統領の独島/竹島訪問(韓国大統領としては始めて)以降、この問題を取り巻く状況は深刻さを増しており、両国の感情的対立や相互不信も強まっているように見える。

独島/竹島問題は日韓国交正常化交渉(1951年-1965年)においてその解決に向けた論議が行われた。しかし、両国の見解の隔たりは最後まで埋まらず、両国政府は独島/竹島問題の棚上げに合意した。すなわち、独島/竹島が日韓どちらの国に属するかという領有権問題が明確に解決されないまま、国交正常化が実現したのである。1996年の韓国政府による独島接岸施設建設から始まった両国の対立をはじめ、1999年の新日韓漁業協定の暫定水域(韓国では「中間水域」と呼ぶ)設定をめぐる対立、2005年の島根県による「竹島の日」条例制定と韓国側の反発、近年における日本の教科書の竹島記述問題、さらに、2012年8月10日の李明博大統領による独島/竹島訪問と日本政府の国際司法裁判所による問題解決要求(国交正常化以来初めて)などは、結局、国交正常化交渉の時にこの問題が明確に解決されなかったことに起因している。こうした意味で、現在の独島/竹島問題を理解するためには日韓国交正常化交渉において独島/竹島問題がどのように交渉され、どのような合意がなされたのかを明らかにすることが重要である。本研究が日韓国交正常化交渉における独島/竹島問題を取り上げる所以はここにある。こうした問題意識から

これまでの先行研究は日韓国交正常化交渉における独島/竹島問題を、独島/竹島をめぐる両国の領有権争いとして位置付けた上で、主に政府側の視点に基づいて交渉過程を考察・検討してきた。しかし、先行研究の多くは日韓国交正常化交渉において独島/竹島問題が持つ重要性や両国政府が果たした役割を重視しながらも、他方では一般の人々はこの問題をどのように認識していたのか、なぜそう見るようになったのかという点については十分な考察が行われていない。特に、当時世論形成の主な担い手であった新聞がこの問題についてどのような報道をしたのかを分析対象として取り上げた研究は皆無に等しい。その原因の一つは、それらの先行研究が国交正常化交渉の独島/竹島問題を、主に領有権をめぐる両国政府間の対立という視点から捉える傾向が強かったためである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、日韓国交正常化交渉(1951年-1965年)における独島/竹島問題に着目し、当時世論形成の主な担い手であった両国新聞が、独島/竹島問題をどの程度報道し、報道する場合はいかなる論調を持ち、どのような世論を作り上げようとしていたのか、それが交渉の経過とともにどのように変化するのか(あるいは変化しないのか)といった新聞の報道姿勢と論調の動向を明らかにすることである。

### 3. 研究の方法

本研究を円満に進めるため、まず、日韓国交正常化交渉を検証し、独島/竹島問題をめぐる交渉の推移を考慮して調査対象を特定し、両国新聞の関連記事を収集する計画である。平成25年前半は日韓国交正常化交渉における独島/竹島問題の交渉の実態

を解明する。両国が公開した国交正常化関連外交文書(独島/竹島問題関連)を中心に、交渉の経緯、交渉の内容、交渉の関係者の言動を考察することを主眼とする。平成 25 年後半から平成 26 年度は両国新聞に掲載された独島/竹島問題関連記事を収集し、その言説を比較分析する。

#### 4. 研究成果

分析の結果、日本政府の交渉姿勢は強硬な姿勢から妥協的な姿勢へ、また消極的な姿勢へ変化したという傾向が見られた。例えば、交渉の最終段階になると国際司法裁判所への付託を放棄し、問題の棚上げを示唆するなど問題の解決について消極的な姿勢で終始したと言わざるを得ない。他方、韓国政府の交渉姿勢は強硬な姿勢から柔軟な姿勢に移行し、再び強硬な姿勢に戻った。韓国政府は、独島問題は国交正常化と関係がないと主張してきたが、1965 年 6 月 22 日の本調印の際には問題の棚上げを容認し、国交正常化後に継続交渉するとの立場を示したことは明らかである。

両国新聞の論調について、日本の新聞は交渉過程および日本政府や政党による国内議論に注目し、問題解決を期待する声を多く扱った。他方、韓国の新聞は、日本政府の主張と韓国政府の反応、つまり、両国の応酬に注目し、この問題は交渉の対象ではないと主張した。特に、反日論調が目立った。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

黄宰源「風刺漫画にみる日韓国交正常化」『WASEDA GLOBAL FORUM』早稲田大学国際教養学部、No.10、2014 年 3 月、435 - 463 頁。  
黄宰源「日本の風刺漫画にみる独島問題」国民大学日本学研究所編、『日本空間』16 号、ソニン、2014 年 12 月、127 - 155 頁

Hwang, Jae-won, 2014, "The United States and Japan-Korea Relations: Focusing on the analysis of Political cartoons" *Waseda Global Forum*, No11, pp27-46.

〔学会発表〕(計 2 件)

黄宰源「風刺漫画からみる日韓会談」アジア政経学会 2014 年度東日本大会、2014 年 10 月 18 日。(於防衛大学)

黄宰源「独島/竹島問題の再検証 - 独島/竹島をめぐる日韓の争いが激化する中で」アジア政経学会 2013 年度全国大会、2013 年 6 月 16 日。(於立教大学)

〔図書〕(計 1 件)

黄宰源『日韓領土問題の原風景』、早稲田大学出版部、2014 年 11 月。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

黄宰源 (HWANG, Jaewon )

早稲田大学・国際教養学部・助手

研究者番号：0000478448

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：